

Racing on

Motorsport magazine

3

2009 March
980yen

No.436

特集 | 後世に語り継ぎたい名レーシングカー

全方位解剖 マクラーレンF1

超絶フルディテール・ギャラリー

ゴードン・マーレイの描いた「理想」

「GT1ベース車」としての評価

技術的検証:レーシングカー化の功罪

ライバル他車と比して見えてくるもの

日本のサーキットに飛来した“怪鳥”

歴代カラーバリエーション総覧



09ダカール VWディーゼル車初優勝
新車続々登場 2009年F1プレビュー

[Ronインタビュー] トヨタF1チーム代表兼TMG会長 山科 忠

西山平夫の グランプリ散歩

エフ
F's



にしやま・ひらお。1952年新潟県生まれ。レース雑誌「オートスポーツ」編集部を経て1984年フリーランスのモータースポーツライターとして独立し、国内外のレース取材。90年からはF1取材がメインとなる。主な著書に「キレて 疾れ! 片山右京を追ったF1GP日記」(双葉社)、「ブリヂストンがグッドイヤーを抜き去った日」(講談社)、「君が代が聴きたい・佐藤琢磨とホンダF1の戦いを追って」(続・君が代が聴きたい) (双葉社) などがある。

第20回

Hiroo Nishiyama

「老夢へ」

40年前の京都ホームレス学生賛江

「オレのサインか。ダイナースクラブのサインと同じやがな」

そう言いながら、林みのるさんは右手をジャケットの内ポケットに入れて何かを取り出そうとする。ん？ 林みのるのクレジットカードのサインが見られる!? ボクはこの意外な成り行きに一瞬キョトンとしてしまった。

1月中旬、東京都内のホテルで“FORMULA 20発表会&「童夢へ」出版記念パーティー”なる催しがあり、招待状をいただいたのでノコノコ出かけて行った。コンストラクター3社が独自のデザインで開発したFORMULA 20プロトタイプも興味津々ながら、ボクのお目当ては林みのるさんが28歳までの軌跡をつづった自伝「童夢へ」にサインしてもらおうことだった。

いやサインは口実、本当はこの本を読んでその面白さに打たれた感激を直に述べたかったのだ。

ところが、会場に行ってみるとサインを頼むところの騒ぎではない。ちょっと時間に遅れたこともあってもう会は始まっており、それはいいのだが、関西から植村なおみさんというどこかで聞いたことのあるような名前の才媛アナウンサーが控えているのにもかかわらず、林さん自ら演壇に立って勝手気ままに司会・進行・講演を進める進める。

スクリーンに映像が流れているのに、舞台の袖に行くと係の人に「もうええ、もうええ。ステールは後で見てもうたらいんやから」かなんか指示してる。まるで大学祭の手作り講演会のように、自分の持ち分が終わってほかの人と交代し、観客側最前列の椅子に座っていたかと思うと、スッと演壇に行くと忘れ物の紙類を取ったりして、まあ、せわしない。あのオ、戸田(幸男)さんが話してるんですけど。

FORMULA 20の方はいずれ本誌のどこかで紹介されると思うのでそちらを参照していただきたいが、林さんは「日本のロボコン(ロボットコンテスト)が間違っているのはロボット

技術を競うのではなくて、遠隔操作の方を競っていること。日本のレースも同じで、イギリスからモノを輸入してドライバーを育てることだけに執心している。イギリスのレーシングカーなんて学ぶべきものはもうない。けっきょくドライバー育成システムだけがもてはやされて、レーシングカー造りがないがしろにされている」とまあ、大略そういうことをおっしゃっていた。こんな目ウロコの胸のすく見解は初めて聞いたので、ここに書いておくことにした。

さて出版記念パーティーの方だが、いつ始まったのか分らないようなタイミングでローリングスタートが切られ、後でよくよく招待状を見たら「……ふたつの発表会は独立したものです。



しかし、切れ目なくずるずる続くと思いますので……」と小さい字で書かれてあった。

こういうところがいかにも林さんらしい。

当日のゲストとして旧友の鮎田寛、由良拓也さんと従兄の林将一さんがステージに登壇。当初の計画ではおそらく司会役の植村女史と、司会業“も”する書家・俵越山センセイ(かつての越前屋俵太! ボク、ファンでした!)が林さんとの関係などインタビューするという進行スタイルだったのではないかと思うが、もう林さんはマイクを握って離さない。あげくの果てには由良さんを指して「タクヤとオレを対談させた雑誌があったが、オレは一日の半分酒飲んでいて後の半分仕事して。一日中仕事し

てるタクヤと才能を比べるのがどだい間違ってる」などと脱線、また脱線。そんな調子だから、ホラ、肝心の林さんの本を紹介するスペースがなくなってしまったが、これはもう実際に買って読んでいただくのがいちばんいい。ゲストのおひとりでスピーチされた国会議員の方も「4月に出る定額給付金で10冊買います」とおっしゃっていた(そしたら林さんは『なんや10冊しか買わんのかいな』とボヤいていた)。

ともあれ無類に面白い本で、林さんは販売ターゲットを「ホームレス中学生」としていたが、なんのことはない、林さん自身もある時期ホームレス学生をしていたことがこの本に書かれている。もっともその時の林さんは、レーシングカー造りに没頭しすぎたゆえのホームレス状態だったが、いずれにしても60年代半ばの京都に、こんなブッ飛んだ少年がいたというのが信じられないのである。そしてやることなすことがとてつもなくおかしく、ちょっとホロ苦い。

この快著のアウトラインをひと言で表すなら「自動車レースが輝いていた時代のバック・トゥ・ザ・フューチャー」とでもなるうか。

出版記念会場でサインの求めに応じた林さんが内ポケットから出した右手には、クレジットカードではなくチタンフレームらしき眼鏡が握られていた。ロルフ・シュトメレンが愛用していたような形的眼鏡をかけた林さんはハヤシともミノルとも読めぬ、ウワバミが五頭の象を飲み込んだかのようなサインを書いたその下に、小さくDOMEと添えた。オールドファンのボクとしてはMACRANSAの方が良かったのだけど、それは「童夢へ」続編が出た時にお願いすることにしよう。

そう、かつてカラスやマクランサに憧れたオジサンライターの隠居後の「老夢」は、完結することのない「林みのる全集」を座右に朝酒を嗜み、年金給付日を待っているホームレス生活なのである。 □